
星瞬学園（愛と涙と笑いの青春）

梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星瞬学園（愛と涙と笑いの青春）

【Nコード】

N6068Y

【作者名】

梨

【あらすじ】

中高大学まであるマンモス校、星瞬学園。

その学園長の孫であり主人公の良一りょういちは、おぼっちゃま要素ゼロ、頭脳、容姿ともに平々凡々。

なんとか裏口で大学にもエスカレーター入学したが、巧みな学園長の計らい？で勉学に愛に笑いに生きる！

……はず。

1・1 寮とはどういうものかしら？（山田良一）（前書き）

処女作につき、至らない部分も多々あると思いますが、長い目でみていただけるとうれしいです。

どうぞ、よろしくおねがいします。

登場人物の大まかな説明は、文中に入れるつもりです。
わかりやすいように（ ）内に名前を入れました。

1・1 寮はどういうものかしら？（山田良一）

「じいちゃんどういこと！？」

学園長室で、学園長机をバシンとたたきながら良一は学園長に問い
ただした。

どうやら激怒しているようだ。

しかし物語は、この激怒の前にすでに始まっていた。

『青春は、星の瞬く間の如し。
生徒、青春を横臥せよ。』

つまり、

学生時代は思いっきり遊べ

を校風にした、私立星瞬学園がこの物語の舞台である。

田舎と言うには嫌味に聞こえるが、都心からは小2時間の立地であ
る。

しかしながら、最寄り駅には特急はとまらず、そこから駅発のバス
を終着まで乗らなければがこの学園には着かない。

そのため、一部を除きほぼ寮生活が学園の主流である。中等部から
大学まであるにはあるが、大抵の者が檻から逃げるように大学は外
部で受験をする。

その実態は高校までは奔放な生活で進学できるが、大学はマニアックな学科ばかりの癖に、いきなりレベルが上がる。

そのため、学園の校風通りに青春を横臥して過ごした者たちは、学びを怠ると落ちてしまふのだ。

そして今年、学園長である山田善一やまだぜんいちの孫である山田良一やまだりょういちはこの学園の大学部に入学した。

良一は孫の中でもすこぶる無難であると一族では有名。
一とつくが、実は三男。

身長は173cmと男性平均と同じ。

痩せているように見えるが、実は筋肉がないため下腹のへこみが少々足りない。顔はまずまずの具合だが、散髪を怠るために長い髪が邪魔をして野暮ったい。

中学から学園生活で、服装にも無頓着ながらシンプルなものを好むためにまだ見られるという外見だ。

成績は可もなく不可もなく。

スポーツはやればなんでも様にはなるが、長続きがしない。

しかし性格は良いようで、なかなか周りを魅了するようだ。

学園長も、出来の悪い奴ほど……なのか、良一がお気に入りである。

しかし、そんな良一は、どう考えても大学への進学を手にする頭はなかった。

そう、つまり……

学園長に土下座をしたのだ。兄たちと違い、両親も自分には諦めている。

しかし、自分も男だ。

入学したら心を入れ替えて必死に勉強するので、入れて欲しい。それは、楽しさだけで過ごした青春をやり直したいと言う、良一とは思えない懇願だった。

学園長も（孫には甘い）男だった。

「良一は悔い改める必要などないよ。お前は私の理想に誰よりも従って生きてくれただけなのだよ。これはそのお礼だよ。」

と言って、入学を許可してくれた。
配属は、

人間環境学部 健康生活学科。

健康に生活するために、医学をはじめ栄養療法や運動療法を学ぶ学科で、望めば医療関係の資格をゴロゴロとれる学科だ。
全国でも初めての、学園長が考案した学科である。

男性はまだまだ少ないが、良一は気にせず

「俺がじいちゃんの健康を守る！」と、意気込んで残りの高校生活を横臥したのだった。

1 - 2 (前書き)

『星瞬』は造語です。

実際にそういう言葉は存在しません。

さて、良一になにがあったかというところ、大学入学のために新しい寮へ行った際のことだった。

今年は稀にみる学園の人気ぶりに、4つの寮の収容人数を超えてしまい、臨時にマンションを改築し第5寮として使用する事となった。

良一には、その第5寮の最上階があてがわれた。

他の寮は、2〜4人で1部屋使用しているが、第5寮はマンションだったために六畳のワンルームではあるが1人1部屋という贅沢さであった。

また、食堂などの設備もなく、ベッド以外の家電や家具は自己負担のため、一定以上の家庭からしか第5寮には入れなかった。

中高と寮生活に慣れていた良一にとって、一人の空間の少ない実家は居心地が良くなり、寮の解放初日から引越す事にした。

さっそく荷物をほどこき、適当に配置すると早々にやる事が尽きた。

「暇だ……。じいちゃんどこでも行くかな……。そういえば手紙もらってたっけ。」

思い出したようにガサガサと荷物を漁って手紙を探し出し、読んだ。

良一へ

星の瞬く間の青春を横臥せよ。

お前の学園生活に幸あれ。

P・S・

サプライズプレゼントを用意したので、気に入ってくれると嬉しい。

自分でサプライズと言ってしまつてはサプライズでは無いのではな
いかとつつこみを入れながら、良一は手紙を閉じた。

はて、手紙以外に渡されたものは無いはずだ。

他に封筒に入っていないし、手紙に細工がされているわけでもない。

悩んでいると、隣のドアの開いた音がした。

まだ入学式まで半月もあるのにせっかちな奴もいるなど、自分を棚
に上げて考えながら、隣の音に聞き耳を立てた。

どうやら荷解きをしているようだ。

良一の部屋は707なので、方角的に706だ。

（手伝つて、お礼にゲームでも借りるか。）

ちやつかり礼まで考えるのが良一らしいが、単に暇つぶしに遊び相
手になつてもらえればというのが本音だろう。

靴を履き、隣の部屋のドアに向かいチャイムを鳴らした。

はーいという声とパタパタと弾む足音に、数秒の事で疑問を感じな
がらも答えがでる間もなくドアが開いた。

ボタン

「キヤーツ」

「うわーっ」

開いたドアの先には可愛らしい女の子がいた。

見た目が問題なのではない、性別が問題なのだ。

「う、ごめん！」

良一はなにを謝っているのかわからないまま、この場から立ち去りたい一心で部屋の方へかけだした。

そして次の瞬間、何か黒いものにぶつかった。

どしんっ

「いたた……。わりい、前見てなかった。大丈……ぶ、ぎゃーっ」

当たったのは黒装束に身を包み、数珠を持ったまたしても女の子だった。

どうやら勢いあまって自分の部屋より奥まで走って行ってしまったらしい。

しかし、今度は逆側へ走り出した。

性別が問題なのではない、見た目が問題なのだ。

そしてその足で、良一は学園長室まで全力でむかったのだった。

「じいちゃんどういこと!？」

来客への応対もできるよう広めに造られた学園長室に、良一が机をたたいた音が木霊した。

学園長としてではなく、1人のじじとして相手をする善一は、驚いた様子もなく、激走と激怒で息を弾ませて肩を上下させる良一をたしなめた。

「なにをそんなに怒ってるんだ。サプライズプレゼントと言っただろう。その様子じゃ、喜んでくれたようだな。やはり大学ともなれば、恋のひとつやふたつ……。いくらお前が奥手でも、同じ屋根の下で暮らしていれば自然と生まれるものだよ。なにより実証済みだ。」

善一の言葉に思考を巡らす。

そういえば、兄2人は大学卒業と共に結婚し、すぐに子供を授かっている。

良一は18にしてすでに3人の甥姪がいるのだ。

子供心に早すぎるとは思ったが、親族もそういった結婚が多く、家系なのだと思っていたのだが……

「兄ちゃん達もじいちゃんの仕業か。」

相変わらずホッホッホと気の抜ける笑い声を上げて、話を続ける。

「学生時代の恋愛は一生モノだと私は思っているよ。なにより人を成長させる。それに、いつまでもそんなじゃ、魔法が使えてしまう

ぞ？」

どこで覚えたのか、童貞のまま30歳を迎えると魔法使いになれるという都市伝説を例えに出して、良一が恋愛経験ゼロである事をさらつと言いつつ放った。

さすが学園長、星瞬学園に負けぬ突飛な発想である。

まあ、その突飛な星瞬学園の創立者が彼であるのだが……

「ほつとけ！」

そう良一は言い放って学園長室を後にした。

「ああ、そうそう。ユウキ君も同じ階にいるから挨拶しなさい。あと、今日の夕食はうちに来る約束だぞ。成子^{せいこ}さんも楽しみにしているからな。」

成子とは、良一の祖母である。

良一は、ちゃんと学園長の言葉を最後まで聴き、強めにドアを閉めた。

ボタンという音が短く響き、残された室内にはホッホッホという笑い声だけが木霊していた。

しかし、これは学園長の策略の一部であることを良一はまだ知らないのである。

1 - 3 (後書き)

細々とした導入が終わりました。
次から登場人物の紹介です。

ちよこちよこ情報やタイトルを編集していますが、内容の変更はありません。

2 - 1 灰汁の強い新友（大塚祐樹）

おおつかゆうき
大塚祐樹は、今日からの新居である第5寮の自室のドアの前で考え事をしていた。

彼は大塚祐樹。

高すぎない長身に、細身ながら服の中になかなかの筋肉を隠している。

幼さは残るものの甘いルックスはもう大人の印象が強い。

成績優秀かつ、スポーツ万能。

まさに、天に愛された人物としか言いようがない。

良一とは幼なじみであり悪友だ。

周りから見ても釣り合いな2人だが、なぜかとても仲がよく、いつも一緒に行動している。

色々な説がささやかれているが、実の所は祐樹が真っ直ぐな良一に惹かれていたのだ。

そんな祐樹は、中学から星瞬学園で生活していたが、他の学生と違い、送迎付きでの実家暮らしだったため寮生活は初めてである。

さて、そんな彼がなぜドアの前で立っているかといると、動けないのである。

いや、実際には動けるのだが、動きたくないのである。

なにが彼をそうさせるかというところ……熱い視線だ。

祐樹の部屋は708だが、709の住人と思われる人物がドアの間から顔を出してこちらを見ているのだ。

そしてぼそぼそと数を数えている。

「59・・・58・・・57・・・56・・・」

（うわー……これストーカーかな。っていうか、これは呪いなのか？SPもないし、動いて害はないのだろうか……下手に刺激すると怖いし……0になったらなにが起こるんだ？）

冷や汗をかきながら最善策を模索するが、今まで一人で行動することが少なかった祐樹には対処の仕方がわからなかった。しかし、その間も謎のカウントダウンは進んでいる。

そしてついにその時は来た。

「3・・・2・・・1・・・0。ふふふっ」

不気味な笑い声と共に終了するカウントダウン。

なにが起こるのか、もう起こっているのか、祐樹にはわからない。勇気を出して動いてみようかと思った矢先、逆側から気配を感じた。

（召還獣か！？つまり生け贄は……俺なのか……）

なにやらひとりで盛り上がっているように見えるが、本人はいたってまじめである。

気配が祐樹の真後ろまで近づいてきた。

意を決して立ち向かおうと振り向いたその時、気配の主から肩に初手をくらった。

「よっ、祐樹。卒業式ぶりじゃん。っていうか、いきなり振り向くなよ。」

「良ーい……。」

気配の主は良一だった。

祐樹は緊張の糸が切れたように自分より身長の高い良一にもたれか

かり、ため息を吐いた。

「喰われるかと思った。」

「いや、俺そういう趣味ないし。っていかとうとう祐樹も一人暮らしか。しかも隣じゃん。よろしくな！」

良一は、相変わらず若者特有の屈託のない喋り方で、祐樹に話しかける。

これがおぼっちゃまとして育てられた祐樹には、新鮮で心地よかった。

「ああ、よろしく。」

今の祐樹には、良一はとても頼もしく写っていることだろう。

そんな2人の再会に、水を差すように声が聞こえた。

声の主は709の住人の様である。

か細いが、しつとしとべたつくような女性の声だった。

「見つけた。運命の救世主。」

「ぎゃーっ」「」

2人分の叫び声が、肌寒い空に木霊した。

2 - 2 (大林清子)

「申し遅れました。私、おおばやしせいこ大林清子と申します。今世で救世主にあえるなんて感激です。」

清子はそう告げると、ふふふっと湿った笑い声を上げた。

彼女は大林清子。おおばやしせいこ

漆黒の髪は跳ねはあるものの、肩胛骨がかぶるほどににまつすぐとのび、前髪は目がでるかでないかの微妙なラインで怪しさを増幅させている。

しかし、うつすらと見える顔はむしろ美人の部類にはいるだろう。真っ黒なロングワンピースからはえる手足は漂白剤につけたように白く、まだ3月というのに素足ではいているミユールが寒々しい。

さて、どこからつつこみを入れればよいのだろう。

良一と祐樹は顔を見合わせた。そもそも、どちらが彼女のいう救世主なのだろうか。

そしてなにを救えというのだろうか。

生唾をぐくりと飲み込み、良一が代表して問うた。

「あの……初めましてだよね？俺、山田良一、んでこっちが大塚祐樹。救世主って何を救ってほしいのかな？こいつも用事が多いから、話だけなら俺が聞くよ。」

どうやら良一は、清子が祐樹を口説いているのだと解釈した。

もともと祐樹はもてるタイプで、逆ナンなどもしょっちゅうであった。

しかし、本人はあまり興味がないため、その女の子達を追いかうの

はいつも良一の役目であつた。

きっと救世主様というのもその類の話であろつ。しかし、始まつてもいない大学生活において、いきなりお隣さんといざこざを起こすわけにはいかない。

軽い自己紹介と共に救世主の意味を問うたその清子の答えに、2人はさらに驚いた。

「違います。救世主様は山田さんです。私の願いを……、叶えてくれる方が午後3時38分55秒にここに現れると、書いてあつたんです。」

「ど、どこに？」

狙われているのが良一と分かり、祐樹も会話に参戦した。

「さっき……山田さんが私を押し倒していったときに……きれいなアザが出来ていたので占つてみたんです。そしたらね……、本当だった。やっぱり私の占いつて、当たるんですよね。」ふふふつと笑い声は相変わらず湿っている。

初対面で、やっぱりと言われてもうなずくことは出来ないが、祐樹は良一の服をつかんだ。

「お前、本当に知り合いじゃないんだな。」

良一が首を縦に激しく振る。

「ああ、確かにさっきの事は悪かつたと思っている。まさか救世主つてのはその仕返しなのかも……」

それを聞いて、裕樹はわなわなと震えた。

そして、祐樹は激怒した。

「初対面の女性を押し倒すなんて、見損なつたぞ！しかも青あざが出来るような汚し方……お前だけは信じていたのに。所詮お前も、俺の前だけの良い子ちゃんかよ！」

そして祐樹は熱かった。

拳を良一の頬目掛けて振り上げた。

もちろん良一は避けようとしたが、それが仇となって拳は鼻にヒット。

避けた先の壁に後頭部をぶつけた。

生まれ持った石頭に助けられ、「痛い」で済んだのは不幸中の幸いだ。

常人ならば脳震盪くらいでは済まなかつただろう。

「いてて……おい、祐樹。お前なんか勘違いしてないか。確かにさつきは、慌ててたせいでぶつかつても謝らなかつたが、ここは新築のコンクリートだ。大林さんはひどく汚れてはいないはずだ……」

痛さに耐えながらぼつりぼつりと良一が説明すると、祐樹は把握したようで顔を真っ青にさせた。そして謝ろうと口を開けた時、祐樹のよりも早く声が聞こえた。

「やめてー！その罪深い名で呼ばないで。神のいないただ広いだけの木々なんていらないわ。小さくても良いから森が良かった。森ならばきつと占い師としてももっと力を付けられた。いえむしろ今が林なのだから神がいない状態で……ブツブツ」

どうやら清子は、苗字が嫌いらしい。

清子は、ひざを突いて頭を抱えながら、ひたすらブツブツ……と自分を中傷するような、懺悔するような言葉を並べている。

時折聞こえるふふふつという笑い声が、痛々しい。

男2人は、さっきまでの喧騒はどこへやと言った印象で、清子の対処に困惑した。そして、良一は先程ぶつかった件をまだ謝っていない事を思い出した。

きつと苗字がいけないのだという推論をもとに、今度は慎重に話しかける。

「さっきはごめん、清子。俺、真っ黒な服で数珠持ってるとか幽霊かと思ったんだ。なんか呪文も唱えてたみたいだし……よかったら友達になってくれないか……な。」

良一の発言に、祐樹はどこから突っ込めばいいか迷っていた。

（女の子相手にいきなり呼び捨てかよ。それに言い訳かと思いきや、結構ひどいことやってないか。それに友達って……逆ナン相手に振り文句を言ったつもりでいるのか？）

結局、口を開閉させただけでなにも言えず、視線を清子に向けた。すると清子は、さっきまで顔を覆っていた手で、コンクリートの床に『の』の字を書いていた。

そして、ちらちらと良一を見ながら湿りに照れの混じった声で囁いた。

「や、やっぱり占いは当たってたわ……。私の願い事がかった。

……これからよろしくね。山田……く……ん。」

どうやら君付けを初めてしたようだ。

顔を真っ赤にし、瞳も潤んでいるようだ。

「おう、よろしくな。清子。」

たらしと言うよりも、女の扱いになれていないと思われる良一らしい返事である。

そして清子は、今度は視線を祐樹にかえた。

「私、初めてで2人もお友達ができるなんて、贅沢者ね。よろしく、大塚くんっ。」

よほど緊張していたのか、今度は鳴き声のようだった。

祐樹は、自分も巻き込まれていることにショックを覚え、口がきけなかった。

しかし、返事を聴くまで続くであろう清子の「よろしく」コールに、折れたのは祐樹なのだった。

2 - 2 (大林清子) (後書き)

解説などはなるべく文中に入れるつもりですが、わかりにくいことはつつこみを入れてくれると嬉しいですよ。

3月の4時過ぎといえば、日没も早送りなためにもう夕焼けだ。改築されたばかりの第5寮の壁も、橙に染まっている。

その最上階の707号室に、3人の男女が座っていた。

良一、祐樹、清子である。

ワンルームではあるが、3人ならばゆったりとくつろげるスペースはあるだろう。

しかしながら足を崩してくつろいでいるのは良一一人きりだ。

祐樹はカーテンのかかっていない窓に向かって夕日を全身に浴びて、2人に背を向けている。

晴れやかな笑顔が逆に可哀相に写る。

清子は小さなテーブルに向かって正座をし、下向き加減にもじもじとしている。

時々、何も無いのにふふふっと湿った笑い声を上げている。思い出し笑いだろうか。

さて、この空気をどうしたものだろう。

中高生の頃と違い自由の利いた寮は、用意しなければ何もないという不自由さを兼ね備えていた。

つまり、お茶菓子どころかお茶もない。

しかし、良一はこの後祖父母との約束があり、他2人も今日は下見だけで帰ると言うことで、買い出しに行くほどでもない。

3人は暇つぶし程度の時間を過ごす為に、良一の部屋に上がったのだ。

この手持ち無沙汰な状況をどう打開しようか、三種三様の思いで思案する。

ただ、内心一番焦っているのは、一番優雅に立ち振る舞っている祐

樹であることは間違いない。

「清子ってさ、占い得意なの？」

静寂した空気を変えたのは良一だった。

その問いに、清子は下向き加減の首をさらに下に落とす。

「じゃあ幽霊とか見えるの？この部屋にいる？」

どうやら良一は、占いと霊能の区別が付いていないようである。いつの間にかこちら側を向いている祐樹も、半ば呆れ顔だ。

「私は占いを生業としています。今はまだ学生ですが。どうしてもキャンパスライフに慣れていて……。邪心を抱き兼業などという重罪に手を染める私には、霊の世界のがお似合いですよね。まあ、霊の世界なんて私信じていないんですけどね。所詮、生き物は死んだら無に帰るだけなのだし。ということは、むしろ生命の誕生が神の成せるミラクル……。ブツブツ」

良一はまた清子の自爆スイッチを押してしまったようだ。

時折ふふふっという湿った笑い声が薄暗い室内によく似合う。

祐樹は、呆れ顔から引きつった笑顔に変わり、心の中で放つ言葉を探していた。

（霊は信じないのに神は信じるのか……。いやいやツツコミはまたスイッチを踏みかねないな。俺だって父さんの仕事を手伝っているよ？キャンパスライフに慣れているなんて可愛いね。……。うーん。）

思いつきはするが、声に出す勇気がない。

祐樹に近づいて来る女達と毛色が違いすぎるため、対応に困ってい

るようだ。

結局、こういう時は良一に任せた方が良いという結論にいたり、良一の発言を待った。

「じゃあどうやって占うんだ？」

良一は、あっけらかんと動じずに問うた。

初対面に見た目だけで逃げた者と同一人物とは思えない。要するに、ハプニングには弱い、慣れるのが早いのだ。

「占いは……勘です。」

「はあ!？」

思いがけない答えに、すつとんきな声を上げたのは祐樹だ。

「私って、昔から勘が良いんですよ。何かを見てるとその後の運命の一部がわかるというか……。本当に人は思いがけない特技があるものですね。」

ふふふつといういつも通りの湿った笑い声には誇りが混じっているように聞こえた。

場が和んだように思え、やっと祐樹も口を開くことができた。

「そういえば、さつきも神がいるとかいないとか言ってたけど、名前とかも関係するの？」

苗字という言葉をさけたのは祐樹なりの優しさだろう。

しかし、清子は目をカッと開き、震えだした。

その時、

「林と森の違いもご存じないのですか？最近の若者は……知らない

知識ばかり増えて母国の歴史に目を向けないとは何とも嘆かわしい限りです。そもそも、大の男2人がかりでか弱い女性を密室に連れ込んだあげく、質問責めとは……嘆かわしい限りです。」

ノックやチャイムもなしに突然入り込んだ男子高校生を、良一は知らなかった。

制服から星瞬の学生とわかるが、年上を若者呼ばわりするとはなんと爺臭い男子だ。

「小森様……。」

どうやら、清子の知り合いの様である。

2 - 4 (小森純平)

小森という男子高校生は、清子の隣に片ひざを付き話を続けた。

「林と森の違いは、木々の量ではありません。語源は諸説ありますが、人工的に『生やし』たものを林。自然に『盛り』上がったものを森と言います。つまり森は神の仕業であり、神の降りてくる神木ならば1本でも『もり』と付けることができます。もちろん神木につきものの『杜』や、代々それを守っている『守』にもかけているでしょう。」

淡々と話すその口調から、彼の人柄が伺える。

ぽかんとした顔で見る2人に気付いたのか、続いて自己紹介が始まった。

「申し遅れました。僕の名前は小森純平こもりじゅんぺいと言います。清子さんのマネージャーこもりじゅんぺいをしています。」彼の名は小森純平。

170cmもない身長に、程よい肉付き、幼い顔立ちは性別を感じさせない。

春休みなのに制服姿なのは疑問だが、おかげで周りは純平が男子であると自信が持てるほどだ。

長めだが清潔に切りそろえられた髪は、良一のそれとは対照的だ。

今年、星瞬学園高等部3年に転入するそうで、星瞬学園大学に入学した清子を追ってきた様だ。

清子の占いのアシスタントをしているようだが、『占う』という行為以外の経理や雑務全般は彼が行っているらしい。

端から見ると2人の関係は謎が多い。

しかしながら、純平が良一達を見る眼差しは、野党から姫を守る騎士のように鋭い。

純平は、軽い挨拶と自己紹介、そしてこれまでの経緯をまるで見ていたかのように、こちらの知りたい内容を話すと、清子に目を向けた。

「うちに居づらいからと言って、布団ももってこないでどうやってすごすつもりだったんですか。いくら水道や電気が通ってたって、清子さん料理できないでしょう。と言うかお金もってきたんですか？」

どうやら清子に生活能力は無いらしい。

うなだれる清子を半ば強引に、しかしながらとても丁寧扱いながら、帰るよう促し承諾させた。

玄関に向かう2人を見送ろうと、良一、祐樹も後に続いた。

時間も良いので、祐樹もこの後帰るつもりだ。

ただ、清子が苦手な様で、いったん自分の部屋へ戻り時間を置くつもりらしい。

祐樹が、やっと終わる不思議な空気の時間にほっとしていると、不意に清子が振り向いたため心臓が凍り付きそうになった。

清子は、美人を台無しにする様なひきつった笑顔で湿った声で語りかけてきた。

「ま、また話してくれますよね……。今日は……。とても楽しかったです。」

いくら楽しそうにしているようでも、ふふふっという笑い声は湿っていた。

「おう、またな。」

清子とは対照的なトーンの良一の声は、凍りかけた祐樹の心を暖めてくれた。

いつの間にか時をいくらか過ぎているようで辺りは夕焼けから闇に変わっていた。

これが、良一と祐樹が大学生活で初めて出来た灰汁の強い友人、清子との出会いだ。

3 - 1 愛のある晩餐（山田善一、成子）（前書き）

かたつむりペースにものを考えているようで、文字の割に物語が進みません（^^;）

他者様の作品の投稿を待ち望んでいるだけの時には、気づかなかつたことです。

パソコンでも打ってみました、職業柄まとまった時間を費やすことができないため、ケータイでの投稿のみになると思います。見苦しい点など、是非ご教授下さい。

3 - 1 愛のある晚餐（山田善一、成子）

「久しぶりね、良一。今夜はお泊まりしていくのよね？善一さんに聞いて、準備していたの。話したいことがたくさんあるのよ。」

口調は異なるが、軽やかに話す様は良一と似ている。

彼女は山田成子。（やまだせいこ）

良一の祖母である。

若くはないものの、真っ直ぐ伸びた背筋と、きちんとした身なりに若々しい印象を受ける。

ころころと表情を変えるかわいらしいおばあちゃんである。

しかし、出会い頭のハグは国を考えていたきたい。

「遅刻だぞ、良一。遅刻は待たせたすべての者の時間を、愚か者のために費やすのだぞ。私たちと河野、そしてイチの尊い時間が無駄になってしまった。」

ホッホッホと、良一に説教をしながら、内容とは対象的な笑い声で現れたのは善一だ。

星瞬学園の学園長こと山田善一。やまだぜんいち

真顔では年相応の威厳がある2枚目だが、笑うとクシャクシャによる皺が彼の生き方を物語っている。

この年齢の日本人男性で、ここまで蝶ネクタイの似合う者はなかないだろう。

成子とは、未だに、年に一度の2人きりの旅行を欠かさない熱愛ぶりである。

そして、河野とは山田家の執事で、妻と共に住み込みで長年世話をしてくれている。

イチはペットの柴犬だ。

「お久しぶりです。良一お坊ちゃま。」

本来ならば定時を過ぎている河野が、軽く頭を下げ挨拶をした。おそらく、良一に会うべく待っていてくれたのだろう。

そしてイチは、夜は食事をとらないため、居間の毛足の長い絨毯の上で誰よりもくつろいでいた。

数年前ならば、遊び相手をもとめて来訪者の度に尻尾をふって来たものだが、今ではこちらから挨拶に行くまで恨めしげに見てくるだけだ。

尻尾の振り方も、挨拶の催促をしているかのようである。

良一は、それぞれに丁寧な挨拶を交わしながら、晚餐の席についた。祖父母と自分だけで使うには大きすぎるダイニングは、日々の2人の食事の様子を想像させ、心を痛める要因だ。

善一と、良一の父は、共に仕事熱心だが方針の不一致で仲違いをしている。

そのため、職場が同じ市内にあるものの、同居してはいないのだった。

祖父母の家に良一が来ると、食事はいつも好物を並べてくれる。

しかし、その内容は良一が小学生の時分で止まっているようで、オムライスやハンバーグ、カレーなどお馴染みのものばかりである。本来ならば飽きてしまうメニューだが、河野夫妻にかかれれば懐かしさと新しさを併せ持った料理に仕上がる。

今日のメニューは春野菜のカレーに、キノコと香菜のスープ、コー

ルスロー、桜シロップのゼリーである。

カレーは、辛みが抑えられている分、春野菜独特の苦みがある情緒あふれた大人の味に仕上がっている。

今ではなんともなく食べることの出来る菜の花が、今でも他の野菜よりも細かく刻まれて入っていることが良一の口角を自然と上げてしまう。

カレーには珍しいであろう、シャキシャキとした国産タケノコの食感も妙に心地良い。

スープは塩分の取りすぎを抑えるため、塩味の強いカレーに対して薄味に仕上げている。

しかし、薄味でも満足出来るようにスパイシーなカレーと対照的な香りを豊かに利かせている。

コールスローは河野の奥さんの特製で、良一の好物だ。

そのため、これだけは変わらず昔のままである。

桜のシロップは、毎年祖母と河野夫妻が桜の花を摘んで塩漬けしたもので作っている。

これは去年のものだろう。

市販のものとは違う、淡い桜色が可愛らしい。

良一は幼い頃をこの家で過ごしたため、河野夫妻の料理が言わばお袋の味である。

豪華ではないが、色彩豊かで、鮮度や産地、栄養にも気を使っている。望めば、毎日フルコースや満干全席も可能だし、それを作るだけの技術を河野達は持っている。要は、山田夫妻の嗜好の問題なのだが、孫に本当の意味での良いものを食べさせたいという思いも込められているのだろう。

この、豪華と質素を持ち合わせた料理に舌鼓を打ちながら、賑やかな3人だけの食事が過ぎていった。

さて、食事も一段落し、デザートに手を付ける頃の事である。
他愛のない笑い話の延長線で、成子が話題を変えた。

「そういえば、善一さんから聞いたのだけれど、良一は将来私達専属で健康管理をするそうね？その気持ちは私はとても嬉しいけれど……若いうちからそんな閉じこもった未来を想像してはダメよ。」

良一は、デザートに合わせて出てきた緑茶を吹き出しそうになるのを必死で堪えた。

しかし、堪えるのに必死になっているため、目を白黒させている。

「それに、あなたとの未来を夢見るお嬢さんにもかわいそうじゃない。」

続けざまの成子の発言に、今度は大いに吹き出し、緑茶と桜の香りが鼻の奥までまわるほどにせき込んだ。

「……は？」

良一は、なんとか息を正し、疑問の声を上げた。

成子は何が起きたのかわからず、目を見開いて驚いている。

そして、全てを把握し、予定通りと言わんばかりに善一だけが高らかに笑っている。

しかしそのホッホッホという笑い声は、相変わらず気を抜けさせる。

「成子さん、良一は奥手でね。まだ未来の花嫁は決まっていらないよ。うだよ。」

この年で決まっている方が稀では無いだろうか。

と言う疑問は山田家には通用しないようで、成子は手で頬をおさえながら「まあ」と心底驚いているようだ。

そして少しオロオロとした後に、思い出したように良一に近づき、両肩に手を置いて向き合った。

「心配することないわ、大丈夫。善一さんの事だから、きっと候補のお嬢さん達もいるわ。」

「勿論だよ、成子さん。今年は興味深い方が多くてね……。思い切って寮を増やしてしまったよ。」

ホッホッホと気の抜ける笑い声を上げながら、善一はとんでもないことをさらつと言った。

星瞬学園大学のペーパー受験はとてつもなく難関である。

（これは設備や生徒への配慮、将来の選択肢の多さなどの面がすぐぶる良いので、自然と上がっていったためである。）

しかし、外部受験の面接は学校説明会から始まっており、内部受験の面接は高校生活から始まっているのだ。

学園長自ら出向いて魅力的な生徒をピックアップし、その後の個別面接ではその人柄を重視して見られる。

そこで学園長が気に入れば、一般教養の有無のみで合格することができるのだ。

本来ならば許されることではない。

しかし、学園長が入学させた者の多くは、大物の政治家や大企業の社長、オリンピック選手や芸術家、ノーベル賞受賞者など様々な分野で功績を残しているため、後援会は黙認しているのである。

そして今年、この学園長に見初められた合格者の数が倍近くに増えてしまったため、急遽第5寮を設立したという経緯だ。この第5寮の設立は、星瞬学園始まって以来2回目である。

「……冗談じゃない。」

朗らかに微笑んでいる祖父母の前に、良一は低い声でうなづいた。

「俺は……、そんなことの為に大学に行きたかったんじゃない。確かに、じいちゃん達の役に立ちたいと思ったけど……どうやってなんて具体的にはまだ何も考えてなくて……。」

怒ってみたものの、言う内容がうまくまとまらない。

言いたい内容も、なにも考えていなかった自分をさらけ出すようで、なんだか情けなかった。

人間どんなに怒っていても、自分を客観的に見始めると頭も冷えてくるものだ。

今まで育ててくれた祖父母に対しての、多分初めての反発も、決して心地良いものではないだろう。

「……ごめん。色々考えてくれるのは嬉しいけど、もう少し自分でも考えたいんだ。今日はもう寝るね。おやすみ。」

何とかその場を取り繕って、良一はダイニングを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068y/>

星瞬学園（愛と涙と笑いの青春）

2011年11月24日19時53分発行